



2015(平成27)年  
10月1日発行

Vol.64

# ELCO RADAR

Ecological Life and Culture Organization

—— 公益社団法人 環境生活文化機構 季刊エルコレダー ——



## CONTENTS

<b>TOP</b>	学校法人服部学園 服部栄養専門学校 理事長・校長 服部 幸應氏インタビュー 「日本人の未来と『食育』」……………1
《特別連載》	エシカル・プラネット3 ファッションジャーナリスト 生駒 芳子氏…………… 7
《報告》	平成27年度循環型社会形成推進功労者表彰式…………… 10
《連載》	環境を見つめる人々47 立教大学大学院 教授 萩原 なつ子氏…………… 11
《連載》	エコ&ユニフォーム最前線15 ダイセン株式会社 記者 富永 周也氏…………… 12
《会員紹介》	ミスズユニム株式会社 専務取締役 今井 貴宏氏…………… 13

学校法人服部学園 服部栄養専門学校 理事長・校長  
服部 幸應氏 インタビュー



# 日本人の未来と「食育」

服部氏は、服部学園で食のプロを育てるかたわら、世界でもユニークな法律である「食育基本法」の生みの親として知られ、日本人を取り巻く食生活の乱れ、家族形態の変化による食文化の変容、迫りくる食糧問題の危機など、食にまつわる諸問題に警鐘を鳴らしている。食料自給率が下がり続ける深刻な日本の現状とその未来について語っていただいた。(聞き手は、公益社団法人環境生活文化機構・広中 和歌子会長)

## 幼少期と環境への意識

**広中** 環境を考えるうえで人間の生活は非常に密接なつながりがあります。その生活の三本柱ともいわれる衣・食・住の一つ「食」の分野について、本日は、テレビや雑誌をはじめ様々な分野でご活躍なさっている服部さんからお話をおうかがいしたいと思います。

服部さんは、いわゆる料理の専門家というだけでなく、日本人の食に関する様々な問題についても積極的に発言なさっていらっしゃいますね。

私は戦前の生まれで、戦中・戦後の食糧難を経験してきました。そのためか今の日本の食に対するあり方には非常に不安と疑問を感じています。そこで服部さんと食の問題について、いろいろとお話したいと期待してまいりました。

まずはじめに、服部さんの食のルーツについてお話したいと思います。栄養士・調理師を養成なさる服部学園の創業者のご子息としてお生まれになられて、やはり幼い頃から料理の勉強や修業をなさってこられたのですか。

**服部** 私は1945年の生まれになります。家が料理学校をしていて両親が忙しいこともあり、おばあちゃんっ子として育ちました。私の古い記憶は4歳くらいからで、その前は覚えていませんが、祖母たちによると「2歳の時から包丁を持っていた」のだそうです。

父は1939年の設立当時から栄養士の養成も行っていました。戦前はまだ栄養士に関する法律がなく、戦後の1952年に栄養改善法ができて、これによって

栄養士の養成が法的に認められることになりました。

さらに1958年に調理師法ができました。この法律は父が提案してできたもので、これによって調理師は資格が必要になりました。

**広中** ご幼少の頃から料理がごく身近なものだったのですか。その道に進まれるにあたり、レジスタンスはなかったのですか。

**服部** 葛藤や抵抗感といったものは全然なかったですね。よく皆さんにそういうことを聞かれますけど、両親の言うことは素直に聞いていました。小学校4年生の時に、父に「明日からレッスンするから、まず丼物をつくれ。まずは天井だ」と言われ、米の研ぎ方から始まって、天つゆから揚げ物まで全部を自分ひとりでつくりました。

**広中** そこから本格的に料理の世界が始まったのですか。医学博士の資格もお持ちですが、大学では初めから医学部でいらしたのですか？

**服部** いえ、私は立教大学を出て、その後に昭和大学の医学部に入りました。医学部といっても私の場合、医者になるつもりはなく、医学博士号をとるために通っていたのです。「食」と「医」との関わり合いが非常に重要なポイントであると考えていたからです。そして、なんといっても言葉は専門的な知識、そしてそれを裏づける資格によって説得力をもちますからね。

**広中** なるほど。料理にとどまらず、食にかかわる幅広い問題、さらに環境などにも強い興味をもたれて発言なさるようになったのには、何かきっかけがあったのですか？

**服部** 30代の頃に、レイチェル・カーソンの『沈黙の春』を読んで、大変刺激を受けました。食のことを考えるうえで、環境の問題がいかに大事なことかと意識し始めましたね。

**広中** 『沈黙の春』は環境問題の歴史を語る上で非常に重要な本ですね。DDTを始めとする農薬などの化学物質がいかに環境を破壊しているか、私などもこの本によって知らされたものです。アメリカでは環境保護運動も起こり、当時のケネディ大統領をも突き動かしました。服部さんがこの本に衝撃を受けられたのは、やはりご自身が医学の勉強をなさったからかもしれませんね。

## 食育の重要性

**広中** 学校が大きくなるのと一緒に成長され、さらには料理そのものにとどまらず、その根本にある栄養や食育といったより幅広い問題に関心を持たれ、そこで医学博士号もとられたのでしょうか。

私は1957年からアメリカで20年ほど暮らしていましたが、その間に日本はどうか食糧難をくぐり抜けて、みんなが食べられる時代になりました。そういう中で、私のイメージとしては、戦後の日本では料理教室が非常に流行ったように思えます。しかし、食育という言葉はあまり聞きませんでしたね。

**服部** 確かに戦後しばらくは、まだ食育という言葉は一般的ではなかったですね。いま振り返ると、1965年から85年までの20年間で、日本の食の栄養バランスが一番取れていた時代でした。

1965年以前の日本は、栄養失調も多くて、炭水化物を中心とした食生活でした。ところが、戦後はアメリカの影響を受けて食生活が変わっていきます。牛乳を飲むようになりバターも使われ、そしてステーキも当時の憧れでした。

**広中** 学校給食の影響も大きいですね。

**服部** パンが中心でしたが、大きな支えになりましたね。こうして徐々に食生活が豊かになっていったのですが、1980年以降になりますと、今度は急に高脂肪、高タンパク、高カロリーの栄養過多になりました。この50年間を見ても、例えば糖尿病有病者数は50年前には3万3,000人程度だったことと比べると、現在は721万人を超えてしまいました。

これらは食生活が原因です。このため人工透析が行われますが、50年前には215人くらいでしたが、今では31万人の方が透析を受けられています。これが大変で、平均一人あたり年間で500万円の医療費がかかります。週に1回や2回の方もいますけれど、3回の方もいらっしゃいます。週3回、透析をすれば年間750万円かかります。それをすべて国の税金で賄うわけですから、いまや医療費が41兆円

となっている時代に、少しでもなんとかしなければなりません。皆さんが気づかずに栄養過多に陥っていることに警鐘を鳴らさないといけないだろうと思いました。そのためにも「食育」が必要なんです。

**広中** この食育という言葉は明治の頃から言われてきたようですが、今日私たちが一般に言うようになったのは、服部さんはじめ、日本の食生活に危機感を抱いた方々がこうして啓もうなさったからだと思います。しかも、食育は決して生活習慣病の話だけではありませんね。

**服部** 私は世界76ヶ国を回って、それぞれの国の家庭での食生活や食文化を調べてきました。その中で日本の家庭だけがテレビを見ながら食事をしているんです。そのため食卓<sup>しゅく</sup>の家族の会話がなくなり、食を通した子どもの躰もなされなくなっています。家族の団らんがなくなるとどうなるか。

ある調査によりますと、子どもたちに「親を尊敬するか」と尋ねると、世界の平均では83%が「尊敬する」と答えたのに対して、日本ではわずか25%でした。ほとんどの子どもたちは、親を尊敬していないのです。これは大変深刻な問題です。

## 食育基本法の成立

**広中** なるほど。改めて食生活、そしてそれを教える食育の重要性が再認識されますね。服部さんが力を注いだ「食育基本法」は、確か議員立法でしたね。

**服部** そうです。父が提案した調理師法も、私が提案した食育基本法も、ともに議員立法でした。

**広中** 食育基本法の成立には、どのような経緯があったのか教えてください。

**服部** 提案そのものは今から18年ほど前になります。当時の厚生省の「21世紀の栄養と食のあり方検討会」委員に選ばれて、その席で食育について持論を述べさせてもらいました。その時の厚生大臣が、まだ総理になる前の小泉純一郎さんで、「面白いね」とおっしゃっていただきました。

そこで私は「ただし、この法律は3省に関わりがあります」と申し上げました。厚生省だけではなく、教育ですから文部省、食糧ですから農林水産省です。小泉さんは「分かった」とおっしゃって各省の局長を呼び、それぞれの割り振りをしていただきました。

そうこうしている間に小泉さんは総理になられて、マニフェストの中に「食育」とは「知育、徳育、体育の基本になるもの」と入れていただきました。

それから少ししまして、当時の武部勤農林水産大臣から講演の依頼を受けたんです。武部さんは、この後に自民党の幹事長として小泉政権を支えることになるのですが、農水大臣の時にちょうど

BSE（牛海綿状脳症）が発生して、大きな社会問題にもなりました。そこで「食の安心安全について」というテーマで講演を依頼されたんです。

この講演の折りに武部さんが楽屋に来られて「今日、よろしく頼むね」と挨拶なされて、「ところで私はこれで帰る」とおっしゃるので、「待ってください、大臣。最後まで聞いていってください。これは大臣にも関わりがある大切な問題ですから」と生意気にもお願いしたんです。

そしたら「分かった」と言って最後まで講演を聞いてくれました。途中、5回ほど秘書の方が「お時間ですよ」と呼びに来られましたが、それを振り切ってくださいました。そして、最後には楽屋にまた戻ってこられて、「今日の話、感激したよ。これ、ほかの誰かに話したかね」とおっしゃるので「小泉総理をご存知です」と答えました。すると「じゃあ、ちょっと総理と話してみる」とおっしゃってくださいました。

その1週間後に「総理とも話したんだけど、法案つくるので、まず食育調査会というものをつくれ」と言われました。これには麻生太郎さんに最初の会長になっていただき、武部さんが副会長として実際上の推進役を果たしてくださいました。私はそのアドバイザーとなって協力し、ようやく食育基本法が成立したわけです。



## 食料自給率の問題

**広中** 日本の食の問題を考えますと、食育と同時に食糧の輸入率が高くなってきたのも心配ですね。



学校法人服部学園 服部栄養専門学校  
理事長・校長 服部 幸應氏

今や日本の食料自給率が40%を切ったとも言われています。

**服部** これは、やはり日本が農業や漁業を捨てて工業化を図ったからです。池田内閣の所得倍増計画は高度経済成長をもたらしましたが、同時に大きな歪みをもたらしました。いまだその根本的な対策をとれずにいます。

**広中** 農村、漁村の若者を「金の卵」と呼んで、中学校卒業と同時に都会に連れてきて工場で働かせる、そういう時代が1960年代にありましたからね。

**服部** 50年ほど前、農業人口は1,424万人でした。漁業人口も360万人いました。それが現在、農業人口が230万人、漁業人口が80万人と大きく減少してしまいました。しかも、農業人口といっても専業者はほとんどいません。95%が兼業農家です。日本の工業化を図るために、農業従事者、漁業従事者をみんな工場の工具にしてしまったということです。そして、急激な工業化は水や空気を汚し、深刻な環境汚染を引き起こしました。

**広中** 水俣の公害をはじめいろんな形で日本は苦しみました。ようやく今はきれいな環境を取り戻しつつありますね。

**服部** 日本の工業化は、まさに『沈黙の春』を彷彿させる時代でした。現在は公害問題などは改善されましたが、農業人口は深刻です。毎年、農業関係者が亡くなるなどして20万人もリタイアされているのに対し、新しく農業を始める人は6万人です。

**広中** その新しい農業従事者というのは、若い人なのですか？

**服部** いえ、若い人はほとんどいません。現在、農業や漁業従事者の平均年齢が64.4歳です。そして跡継ぎがない。農業の場合は20万人が毎年なくなり、新しく入ってくる人が6万人。この6万人の内訳は、6割が65歳まで普通の会社勤めをしていて、定年になったからそろそろ農業でもやろうかと入ってくる人です。後は40代の人で2万人ほどになります。ほかにこんな国はありません。

**広中** 諸外国はどんな状況なんですか。

**服部** フランスは農業国で、65%ほどが40代前半です。日本より24歳くらい若い。日本は働き盛りを過ぎてから始められるのです。それでも皆さん頑張っていますが…。でも日本の農業というのは根本から考え方を変えていかないと、どうしようもないところまでできています。食糧の輸入をカロリーベースで見ますと、いま61%になっています。つまり日本の食料自給率は39%ということです。いまから50年前には73%だったのが、がたがたと落

ちてきました。

45年前にフランスのドゴール大統領が「食料自給率が100%に満たない国は独立国とは言えない」とまで言っています。そうしたら、当時、食料自給率が47%でしかなかった英国が、今では72%にまでなりました。これにはチャールズ皇太子が大きく貢献なさいました。あの方は英国の環境保護団体「ナショナル・トラスト」の総裁でもあり、環境問題や食の問題にも積極的に発言している人でもあります。

**広中** 自給率が半分以下だったのを7割以上に。これはすごいことですね。

**服部** ドイツの食料自給率も69%しかなかったのですが、今は83%にまでもってきました。フランスはドゴール氏が胸をはって言うだけあって、もともと105%あったのが、今はさらに117%となりました。アメリカは102%から、今は136%にまで伸ばしてきています。

先進国が一次産業に力を入れている中で、日本だけが逆の動きを見せているわけです。先ほども申しましたように、農業従事者が毎年20万人もやめていって6万人しか入ってこないのですから、14万人ずつ少なくなっていく。いま230万人しかいないのですから、このまま毎年14万人ずつ減っていくと、計算上はあと17年で農業従事者がゼロになってしまいます。そういうことは国も言わないし、誰も考えようとしません。私はたいへん不安になってきます。

**広中** これまで国にもいろいろアドバイスをしてこられたと思いますが、いま国として現実に食料の自給率を高めるには何ができるのでしょうか？

**服部** 日本は、このままでいったら農業や漁業従事者はいなくなってしまいますから、食糧は100%海外から輸入することになるでしょうね。いま世界の人口は77億人ともいわれています。そのうち、豊かな人たちが1割ほど、栄養失調の人たちが2割ほど、残りの7割くらいの人はなんとか生きてられる程度です。

しかし、あと35年もすると世界の人口は100億人になります。世界の食糧というのは、試算によると100億人の食を満たすほど生産できません。各国は余剰食糧を持ってなくなります。自分の国だけで精一杯で、他国に食糧を回す余裕はなくなります。また中国や韓国なども食の買い付けに勢力を伸ばしています。いつまでも日本が食糧を安定して買い付けできるとは限らないのです。

世界の人口が猛烈な勢いで膨らむ一方で、日本だけは減ります。現在の1億2710万人が、あと20年後には1億1,000万人に、35年後には9,000万人、

50年後に7,000万人です。ですから海外から人を雇い入れないと社会は動かなくなるでしょう。

しかも高齢者社会になります。3人に1人が65歳以上になってしまい、体の動けない人が多くなりますので医療費もかかります。やはり事前に生活習慣自体を変えていく取り組みをしていかないとなりません。

## 食の祭典・ミラノ博

**広中** 今年、ミラノ国際博覧会が開かれていますね。これは食がテーマの博覧会ですが、服部さんはこれにも関わられましたね。お話のように、非常に深刻な食の問題を抱えている日本として、ミラノ博では、日本から世界に向けてどんなアピールをなされたのですか？

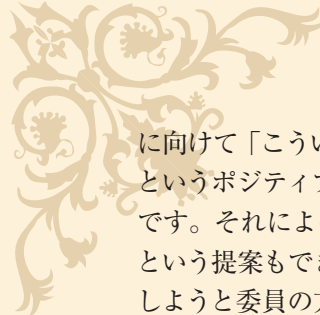
**服部** ミラノ博のテーマは「地球に食料を、生命にエネルギーを」というもので、148カ国が参加しました。今年の5月1日から10月31日までの184日間に及ぶものですが、私は日本館の「基本計画策定委員会」の委員として参画しました。私たち策定委員は、当然、提案したものが日本館に活かされているだろうと期待して、ミラノまで見に行ってきました。しかし残念ながら、私たちの提案は全くと言っていいほど活かされていなかったのです。

**広中** それはどういうことなんですか？

**服部** 日本の現実は農業ひとつをとっても深刻な状態です。世界に向けてこのネガティブな現状をアピールする必要はありませんが、少なくとも世界



公益社団法人環境生活文化機構 会長 広中 和歌子



に向けて「こういうことに力を入れていきましょう」というポジティブなキャンペーンは可能だったはず。それによって世界をもっと明るくしましようという提案もできるはず。そのような方向性にしようとして委員の方々は言うてきたんですよ。しかし結局、食の将来性について、日本館ではなんの提言も感じられません。ここには22世紀に向けた種が何もなかったのです。

例えば、「一汁三菜」が表現されたブースでは、食事のTV映像に箸で差しておかずをプラスマイナスさせて一汁三菜を体験するのです。しかし、差し箸は日本では絶対にいけないことです。せっかく食育をテーマにしているのに、こういう日本の食文化をないがしろにしてしまうのです。注意しても若いスタッフはそもそも何が悪いのかが分かっていないのです。悲しいことですね。

**広中** 日本のテレビでもミラノ博の様子は放送されましたが、そういった内容についてはほとんど放映されませんでしたね。他の国の様子はどうか。世界の食糧事情についての的確な指摘や提案があったのですか。

**服部** 各国それぞれ面白いですよ。例えばスイス館では、チョコレートの箱が館いっぱい並んでいて「好きなだけお持ちください」とあるんです。そうすると皆がポケットに入れて持って帰ります。そこで一言「しかし、資源には限りがあります。チョコレートが一個もなくなったら、この館は封鎖です」とある。うまいですね。そうやって大切なことを、来場者に教えるわけです。

**広中** なるほど。資源がいかに大切なものか、その有限性を教えるわけですね。

**服部** フランス館では5月1日のオープニングの時にパピリオンの周りに様々な種類の種を植えました。私は何度か訪れましたが、行くたびにそれが成長しているんです。10月31日の閉館の頃にちょうど収穫するそうで、そうなると閉館の頃にまた行きたくくなりますね。

**広中** 服部さんは、現地ミラノまで何度足を運ばれたのですか？

**服部** 今のところ4回行ってきました。

**広中** 他にはどこの国が面白かったですか？

**服部** 韓国が素晴らしかったですよ。外国のメディア、なかでも現地のイタリアのメディアが相当高く評価していましたね。日本は残念ながら現地のメディアからの評価は低かったです。

韓国は料理を出すテーマがはっきりしているんです。例えば「ヘルシー」「モダン」などとなっていて、お皿の盛りつけはまるで和食のようにきれいな盛り方をしているんです。韓国料理というと、私たちの

イメージですと皿に混然と盛っているように思うのですがね。

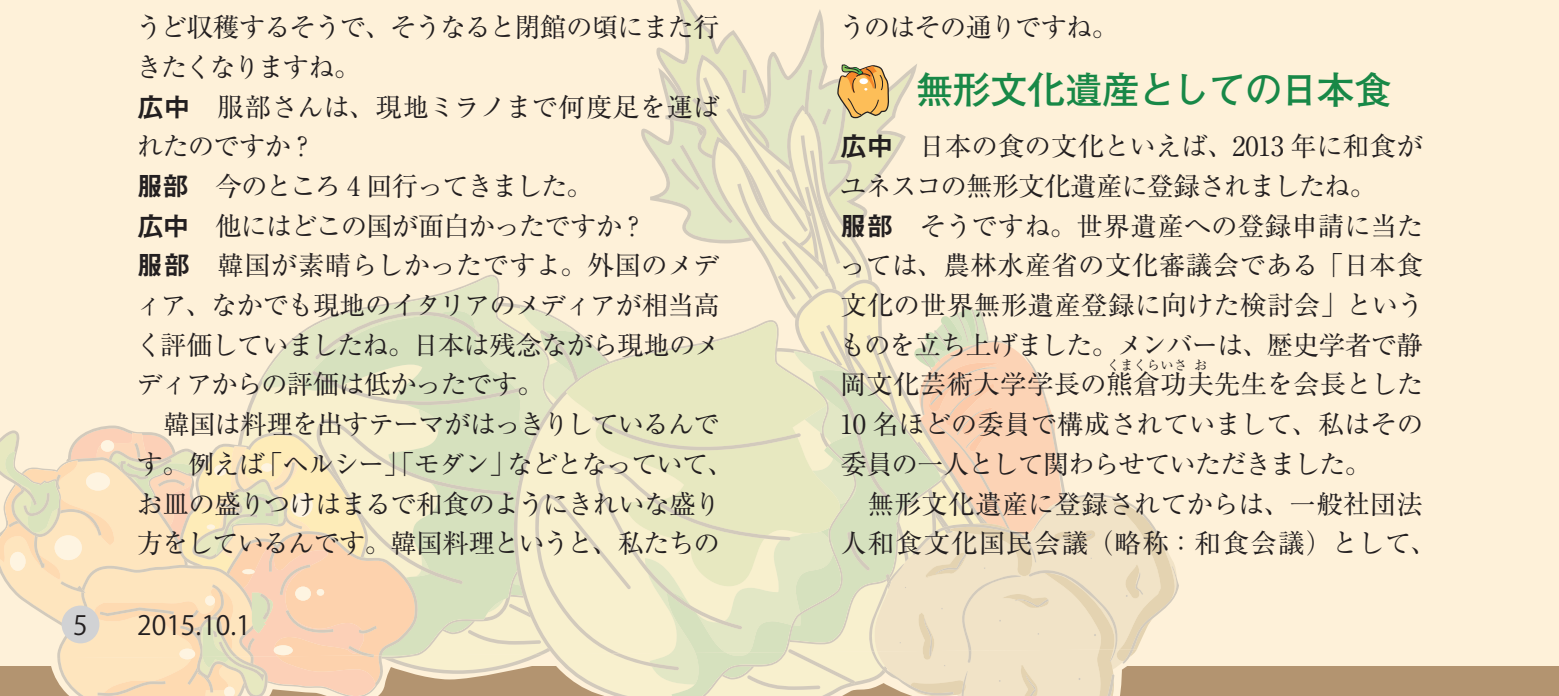
**広中** 美しい盛りつけといえばむしろ日本の文化ですね。

**服部** 私も、これって日本じゃないのって言ったら「日本というのはもともと我々の国から得た文化なんですよ」という説明でしたね(笑) 同じように中国館ではお寿司がたくさんありました。これも日本の文化じゃないのって聞きましたら「スシね。あれはアジアのもので、日本は私たちの考え方を最終的に形にただけだから、スシも私たちの文化ね」ということでした(笑) 確かに握っている職人さんはみんな中国人でしたね。

**広中** アメリカでも韓国人や中国人の寿司屋が多いですね。

**服部** 確かに寿司自体のオリジナルは東南アジアなんです。冷蔵庫のない時代ですから、食料を保存するためにいろいろな工夫がされました。「なれ<sup>ずし</sup>鮎」といって、魚をお米でくるんで、そのお米が発酵することで中の魚が保存されるわけです。これを「なれる」といいます。食べるのはお米ではなく、中の魚になります。それが日本にも伝わってきまして、一番古いなれ鮎は1,300年前になります。

「鮎寿司」という料理をご存知ですか。なれ鮎同様米で魚を発酵させる郷土料理です。漬けあがると魚を包んでいるお米を洗って、よくお茶づけにして食べますね。非常に臭いのですけど珍味だといって重宝されています。それが寿司の大もとなんです。江戸時代になって華屋さんという人がご飯にお酢をかけた「早鮎」を流行らせたんです。これは「なれる」ではなく「かける」ことによって酸っぱくなり、それにモノをのっけて、忍術のように握ったものの本に書かれています。それが現在のおなじみの江戸前寿司ですね。ですから、確かに「sushi」のオリジンは日本ではなく、アジアだというのはその通りですね。



## 無形文化遺産としての日本食

**広中** 日本の食の文化といえば、2013年に和食がユネスコの無形文化遺産に登録されましたね。

**服部** そうですね。世界遺産への登録申請に当たっては、農林水産省の文化審議会である「日本食文化の世界無形遺産登録に向けた検討会」というものを立ち上げました。メンバーは、歴史学者で静岡文化芸術大学学長の熊倉功夫先生を会長とした10名ほどの委員で構成されていて、私はその委員の一人として関わらせていただきました。

無形文化遺産に登録されてからは、一般社団法人和食文化国民会議(略称:和食会議)として、

日本人の伝統的な食文化である「和食」を適切に保護し、その継承を推進する組織となっています。

**広中** フランス料理もユネスコの無形文化遺産に登録されていますね。

**服部** 実はこれは「フランス料理」ということではなく「フランスの食文化」として無形文化遺産に登録されたのです。2012年には韓国も「宮廷料理」を申請したのですが落ちました。落ちた理由を私たち検討会も調べましたところ、韓国の宮廷料理は、一般の人はほとんどが知らないということが分かって登録されなかったのです。そこで、和食が無形文化遺産に登録された2013年には、実は韓国も「キムチ」で登録が認められたんです。

韓国では9月になると一斉に白菜をツポに詰め込んでキムチをつくるという習慣があり、その時に国も一部負担して、国をあげて行うんです。その文化的な慣習が通ったんですね。あくまでも無形文化遺産ですから、料理そのものは審査の対象ではないのです。もし有形でしたらそこに料理がないといけません。

日本の和食もそうでした、今回登録されたのは「食に関する慣習」なんです。和食が通ったならラーメンやカレーライスはどうなのだという問い合わせがありました。ユネスコの無形文化遺産登録が対象とするのは「無形」の文化であって、特定の食事を対象としてはいません。そここのところはよく勘違いされていますが、和食への関心が高まる良いきっかけであると思っています。

**広中** そうなのですか。私もそう勘違いしていました。

**服部** 日本料理の場合も、正月のおせち料理等の習慣や行事食が無形文化遺産として通ったんです。おせち料理の習慣がメインではありますが、そこに私たちは「その他」として少し膨らませて申請しました。膨らませた「その他」には一汁三菜などが含まれています。

ただ6年に一度の審査がありまして、その習慣がなくなったら登録が取り下げられることもあるんです。日本人に「おせち料理」をつくる習慣がなくなれば、取り下げられるでしょうね。いまやデパートで買ったおせち料理で間に合えず人が増えていますから、これは問題なんです。



## もったいないに立ち返る

**広中** 最後に食品ロスのこともおうかがいます。私たち日本人の生活態度が問われる問題ですが、とにかく安く輸入して、少し賞味期限が切れると捨ててしまう。食に対する危機感なんて、とても感じられません。私は戦後、本当に食べ物が足りなくて、

少々古くなっているかもしれないものでも、もったいないから食べました。この賞味期限というのは、いったい誰が決めているんですか？

**服部** 消費者庁の管轄ですね。今の若い人は臭いをかいで腐っているか判断するといった何かを実際に試して感じるということをしません。ですから、何らかの目安が必要ということだと思います。ただ賞味期限とか消費期限が書いてあるにも関わらず、その期限前に捨てられているものがたくさんあるんです。

**広中** 東京のごみ焼却場を視察したことがありますが、パックになったお茶漬けのりなんて腐るはずなのに、賞味期限をちょっと切れたかその手前くらいのものが大量に捨てられていたのです。

**服部** 本当にそうです。食べられるのに廃棄される物は、どこから出ているかというところ6割が家庭で、4割がレストランやホテルなどです。合わせて年間でおよそ500万tから800万tにのぼります。日本人はこれだけ平気で食べられる食材を捨てている。

ケニア人女性でノーベル平和賞をとられたワンガリ・マータイさんは、日本で学んだという言葉「MOTTAINAI」を唱えた方ですが、その本家である日本に「もったいない」気持ちが失われているのが残念なことです。

環境保護を考える際に、リデュース、リユース、リサイクル、そしてリスペクトをつけた4つのRが唱えられてきましたが、私たち日本人こそ、それに加えて「もったいない」を実践すべきですね。

**広中** 本当におっしゃるとおりですね。私もマータイさんの講演を聴き感動しました。今こそまさに、そういった日本の古き良き精神に立ち返り、食の伝統と文化を次世代に引き継いでいくことが必要ですね。本日は幅広いテーマでお話をいただきありがとうございました。

### 服部 幸應 (はっとり ゆきお)

学校法人服部学園 服部栄養専門学校 理事長・校長  
1945年生まれ、東京都出身、立教大学卒。昭和大学医学部博士課程学位取得。医学博士／健康大使／日本食普及親善大使／(公社)全国調理師養成施設協会会長。多数のメディアに出演、企画・監修も手がける。「食育」に取り組み内閣府「食育推進会議」委員他、厚生労働省、農林水産省、文部科学省など政府委員を歴任。著書に「食育のすすめ」、「食育力」など多数。

# アップ・サイクリングで“おしゃれサステナブル”

ファッションジャーナリスト 生駒 芳子 氏

ファッション雑誌の編集者がパリを訪ねる理由は、いくつかある。第一には、パリコレクションに代表されるファッショントレンドの最先端を観察すること。第二には、ファッションistaと呼ばれるおしゃれな人々を観察すること。そして第三には、トレンドを発信する店を取材すること。

ことエシカルという観点から見ると、この第三の理由（小売りの状況）を分析してみると、時代の動きがキャッチアップできて興味深い。

1997年、パリのサントノーレ通り沿いにオープンした「コレット」は、ファッション、ビューティからライフスタイルまで、最先端のスタイルを発信する基地として、モード雑誌を中心に注目を集めて続けてきているセレクトショップだ。一説には「モードな遊園地」と称されるほど、おしゃれで楽しくて、というファンタジーいっぱいのストアだ。ファッションに関心のある人ならば、パリでは必ず訪れねばならない聖地とされているほど。

そのコレットが独占的に人気を確保してきた流れを大きく変えたのが、2009年パリの北マレ地区に誕生した、社会貢献を軸としたおしゃれなコンセプトストア「メルシー」だ。もともとは高級子供服ブランド「ボンポワン」のオーナーを勤めていたコーエン夫妻が、ボンポワン売却後、マダガスカルの子供たちのために始めたチャリティ活動を主体にして立ち上げたお店だ。メルシーができて以来、パリを訪れるファッション関係者は、コレットに加えてメルシーもと詣<sup>もつ</sup>でる地が増えている。

## 社会貢献＋ファッション ＝メルシー

コーエン夫人はメルシー立ち上げについてこう語っている。「ファッションに興味があったことで、高級子供服ブランド『ボンポワン』を創立し、約30年間にわたり経営しました。通常なら定年を迎える年齢になった時に、これからは人を助けるために生きていきたいと思いました。今よりも若かった頃は自分自身や自分の家族のために労力を費やす

ことで精いっぱいでしたが、改めて自分の人生について振り返ると、果たして自分は困っている人々を助けてきたのだろうか？自分にならできることを、いろいろな人々と分かち合って生きてきたのだろうか？と疑問に思いました。経営していた『ボンポワン』はマダガスカルにアトリエがありましたが、マダガスカルの子供たちを訪れた時、衝撃を受けました。30年間お世話になったアトリエのあるこの国に対して、自分ができることについて考えました。そして恵まれない子供たちに寄付をする財団を創立しました。その活動の一つがコンセプトショップ『メルシー』です」(NOIR hanna/Paris 通信 12 より)

実際に店を訪ねると、たとえば、著名なラグジュアリーブランドの工場で使い道なく捨てられそうになっていた端切れを接ぎ合せて作ったおしゃれなスカーフなどが当たり前のように売られている。リサイクルものも、この店では限りなくおしゃれに変身して売られているので、一見してリサイクルものとはわからないくらいだ。そして店での売り上げの一部（ストアの維持費を差し引いたすべて）をマダガスカルの人々の支援に寄付している。

「寄付をすることでマダガスカルの子供たちを少しでも助けることができれば、という願いがありますが、それ以上に、いずれマダガスカルの人たちが自分たちの力で生きていけるように支援したいです。助けてあげるという立場ではなく、知識を分かち合うのです。具体的には現地に縫裁学校を設立し、今までのファッション界で長年働いてきたわたしたちの経験を生かして、技術を伝えたいです。いずれ現地の人たちがヨーロッパのファッション関連の企業から直接仕事を依頼され、縫裁学校で取得した技術をもとに、仕事につなげていくことが理想です。最終的には縫裁学校の運営によってマダガスカルの雇用人口を増やしていきたいです」(引用 同上)とコーエン夫人は、ストア経営の哲学を語る。

いまやパリを訪ねるファッション関係者は、コレットとメルシーと、両方を訪ねることが習慣化し



ている。そして、ファッションと社会貢献が共存できる可能性を切り開いたという点でもメルシーの貢献度は大きい。

そんなおしゃれリサイクルを称して「アップ・サイクリング」といち早く命名したのもメルシー。お店の地下のアップサイクリングコーナーを訪ねると、誰もが認めるおしゃれなライフスタイルものだけが並ぶ素敵なコーナーがあり、横にはオーガニック・レストランも併設。こちらの新鮮な野菜たっぷりのサラダやジュースは、パリのファッション関係者のあいだでも大好評であり、彼らの打ち合わせや商談の場としても活用されている。

## デザインの付加価値で「アップ・サイクリング」

私はアップ・サイクリングという言葉とはメルシーで初めて出会った。リサイクルとは資源の再循環を意味するが、アップ・サイクリングは、製品化された資源を再利用しながら、その価値にさらなる付加価値がつくようおしゃれなデザインやコンセプトを加えるという価値を高める循環のさせ方だ。

この場合、問われるのはデザインやセンスの力だ。まさにそれは錬金術の世界——地味でおしゃれではないと思われがちだったリサイクルの世界観を大きく塗り替える、まるで魔法のような、そして未来に繋がっていく意義あるクリエイティブな手法なのだ。

## アップ・サイクリングブランドの使命とは？

アップ・サイクリングをキーワードにして、立ち上がったブランドがある。三宅一生氏が、20代の若者たちと構成したクリエイティブ・チーム「リアリティ・ラボ」が開発した「132 5.ISSEY MIYAKE」だ。

2010年8月に発表され、ファッション界で一躍話題になった「132 5.ISSEY MIYAKE」は、70年代よりファッション界をリードし続けてきた三宅一生氏が、20代の若者たちと組んで開発した。まさに未来に繋がるサステナブル・ブランドという点で注目を集めただけでなく、素材として再生ポリエステルを使用し、アルゴリズムの理論で折り畳む構造を開発し、しかも日本の工場や職人とコラボレーションするものづくりという、徹底した「オール・ジャパン」なプロセスにも取り組み、まさに21世

紀のクリエイションの在り方を提示、示唆するインスピレーションなものづくりなのだ。

「これからものづくりに携わる人は、まず第一に、そのものが社会に与える影響について考えることから考え始めて下さい」とは、三宅一生氏から、ものづくりを目指す人々へのメッセージだ。この言葉は、ものづくりだけに限らず、すべての仕事に関わる人々に警告を与える。利益最優先のビジネスモデルが終焉を迎えつつある今、この地球上をよりよい状態にもっていかねばならないことを私たちの使命として考えるとき、三宅一生氏の言葉は、様々な立場に置かれ、様々な活動を行なう我々全員にインスピレーションをもたらす気がしてならない。

再生ポリエステルというと、通常は衣服というより工業製品などを思い浮かべるが、三宅一生氏の開発の手によれば、柔らかくて、うっすらと光沢のある素敵な衣服の素材へと進化する。その再生ポリエステルを、数学のアルゴリズム理論に沿って、折り畳む構造に発展させる。折り畳むと真っ平らな幾何学模様の衣服が、身に纏うと造形的にして彫刻的なフォルムが生まれる。私自身も試しているが、それは想像以上に着ていて楽しく、また周囲の人々を楽しませ、ときに驚かすのに効果的な衣服だ。コミュニケーション・ツールとしては最高の衣服ともいえる。

三宅一生氏は、さらにペットボトルの再生素材を用いた照明器具のブランド「陰翳 IN-EL」も開発。こちらにも折り畳めるうえ、光によって素敵な陰翳<sup>いんえい</sup>のあかりを生み出せる、まさにアップ・サイクリングアイテム、「21世紀の日本」を感じさせる素敵な照明だ。

デザインの力が、哲学が、いかにしてエシカルの領域を進化させるのかということについて、この三宅一生氏の両プロジェクトは多くのことを考えさせてくれる。エシカルのコンセプトと、デザインの力がうまく組み合わせると、未来に向かってサステナブルに生活を豊かにしてくれる世界が生まれる——そう感じさせてくれる。

## エルメスのアップ・サイクリング計画

2011年3月11日の東日本大震災のあと、初夏にパリのエルメスから一つの展示会がやってきた。それは「プティ・アッシュ (petit h)」と呼ばれる、

エルメス史上初のアップ・サイクリングプロジェクトだった。

プロジェクトのリーダーであるパスカル・ミュサル氏に、会場で話をうかがうと次のようなコメントが返ってきた。「私たちは、傲慢過ぎたのです。永遠に資源があって、永遠に新しいものが作り続けられると思ってきました。でもこの世紀に入って、我々はもっと資源を大切に、ものづくりを根源から見直さねばと思ったのです」と語るミュサル氏は、東日本大震災の被害の様子を見て、大きなショックを受けたとも語った。

彼女がとった行動は、こうだ。エルメスの社内のごみというごみをすべて集めてきなさいと号令をかけた。それらをテーブルの上に積み上げ、社内のデザイナー、職人たちに向かって、「これらの素材で、世界に一つしかない、最高のものを作ってみてください」と。そこから生まれたのが「プティ・アッシュ」ブランドだ。ちなみにブランド名の由来は、本体のエルメスが太文字で「HERMES」と書かれているのに対し、こちらは未来に向かう生まれたてのブランドとして「小文字のh」と名付けられた。なんとも洒落たネーミングだ。

ケリーバッグやバーキンの、ちょっと傷ついた革は、本来ならば捨ててしまうところを残し、そこにキャンバス地をつなげて、ランドリーバッグにする。スカーフの傷ついた部分の端切れをアクセサリーにする、などなど。まさに「もったいない」精神が生かされた素敵なアップ・サイクリングの試みだ。

私としては、エルメスという、ラグジュアリーブランド界でも最高峰といわれるブランドが、このようなエシカルなアクションを起こしたことに大きな意味があると解釈している。エルメスといえば、世界中の富裕層に影響を与える力を持っている。そのエルメスが、エシカルの視点でおしゃれを考えることは素晴らしいことであるとメッセージを送り出せば、確実に富裕層に影響を与え、そして広くマーケット全体にもメッセージを送り出すことになる。まさに質的にも量的にも大きな反響が期待できるからだ。

### 東京ブランドもアップ・サイクリングに挑戦

昨今は、エシカルであることが若いクリエイターたちにとっては、もはや当たり前のことになりつつある。実際、東京のデザイナーたちのあいだでも、

リサイクルや伝統工芸世界とのコラボレーション、日本の工場とセッションするなどといったことは、頻繁に起こってきている。

その中でも、アップ・サイクリングとして興味深いのは、TOGAというブランドから生まれた「TOGA ODDS&ENDS」だ。

こちらは、デザイナーの古田泰子さんの一つの体験から生まれたブランドだ。古田さんが数々の工場を訪ねる中、大量生産されながら工場の隅に打ち捨てられ、使い道なく廃棄されるタイミングを待っているだけのアイテムたちに出会った。たとえば、デニムの東の山、あるいはワンピースの東の山だ。それらを見た瞬間、古田さんの頭には様々な思いが宿ったという。

服作りを手がけているデザイナーとして、たとえそれらが大量生産で一律に作られたものであるとしても、ファッションとしての機能を果たすことなく、その一生を廃棄物として終えてしまうことへの疑問から、ならばいっそ、この大量生産アイテムを再生させてみようではないかという思いが、ブランドを起こすきっかけとなったという。

名付けて「リ・マスプロダクト」計画。大量生産ものを再生させるプロジェクトだが、古田さんの手にかかれば、一律のデザインしかほどこされていないアイテムが形を変えて、おしゃれなストリートアイテムへと生まれ変わる。素材として、Tシャツの胸元を飾るモチーフになったり、襟だけ使われたり、ロングスカートがサルエルパンツに生まれ変わったり、古田さんの自由自在な発想から、ためらなく大量生産アイテムが最先端のストリートアイテム、モードアイテムに進化する。それは心地よいほど潔い使われ方だ。

### デザイン力とセンスが決め手!

結論から言えば、アップ・サイクリングの決め手は、やはり作り手のデザインの力とセンスだ。どんな素材もデザインとセンスによって、いままでない価値を備えた新アイテムへと生まれ変わる。そういったおしゃれなアップ・サイクリングのアイテムが進出することで、逆を言えばこれからは、ただ単なるリサイクルではマーケットの中で新たな付加価値を得ることは難しいといえるだろう。

# 平成27年度循環型社会形成推進功労者表彰式

平成27年9月2日、KKRホテル東京（東京都千代田区）において、循環型社会形成推進功労者表彰式を開催し、平成27年度受賞者の鹿島建設株式会社、ファイバーリサイクルネットワーク、株式会社ベネフレックスの3者に表彰状が贈呈されました。

当日は、ご来賓代表として環境省大臣官房廃棄物・リサイクル対策部長 鎌形 浩史氏よりご挨拶をいただき、また、受賞者から謝辞をいただきました。

受賞者謝辞をここに簡単にご紹介させていただきます。

鹿島建設株式会社 安全環境部 企画・監査グループ長 都築 辰夫氏からは、本機構リサイクルマーク付きユニフォームの回収リサイクルの取り組みについて、取り組み開始の経緯や、当初の見込みを超える順調な回収・リサイクル実績を重ねていることをご紹介いただき、一人でも多くの社員が3Rの活動に参加することで、環境活動にますます力を入れて取り組んでいきたいとお話いただきました。

ファイバーリサイクルネットワーク 代表 赤岡 清子氏からは、人とのつながりを大切にしている繊維リサイクルの取り組みについてご紹介いただきました。また、この受賞を、布の循環と布を介してつながった人とのかわりを大切にして活動したいという自分たちの気持ちに対する応援の賞と思い、これを



左から広中会長、(株)ベネフレックス 南田取締役本部長、ファイバーリサイクルネットワーク 赤岡代表、鹿島建設(株)都築企画・監査グループ長、環境省 鎌形部長、環境省 山本企画課長

励みに今後も活動を続けていきたいとお話いただきました。

株式会社ベネフレックス 営業本部 取締役本部長 南田 富夫氏からは、環境活動の取り組みとして36年間続けてこられた環境美化活動、水質資源の確保、本機構リサイクルマーク付きユニフォームの回収リサイクル等の活動についてご紹介いただき、この受賞を糧に今後ますます活動を拡大していきたいとお話いただきました。

受賞者の皆様の今後ますますのご活躍をお祈りしますとともに、表彰式にご参加いただいた皆様へ、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

## 受賞者紹介

### 鹿島建設株式会社

大手総合建設会社。施工 CO<sub>2</sub> 排出量原単位削減、ゼロエミッションの達成、再生資源利用率の向上、生物多様性創出プロジェクトの推進など多様な活動を展開し、さらに同社の制服に本機構のリサイクルマーク付きユニフォームを採用し、積極的に回収・再生利用している。



### ファイバーリサイクルネットワーク

古着や着物などの繊維リサイクルを推進する市民団体。行政に先じて市民・故繊維業者のネットワークを立ち上げ、神奈川県内に古布・古着回収活動を23年間にわたり実施し、日本の着物文化見直しと再活用を提案する場として「リサイクルきものフェア」を開催してきた。



### 株式会社ベネフレックス

自動販売機サービス・フードサービス事業者。飲料の使用済み飲料空容器のリサイクルを推進し、省エネ対策など環境負荷低減活動を行うほか、同社の制服に再生PET素材や本機構のリサイクルマーク付きユニフォームを採用し、積極的に回収・再生利用している。



## ヨシ・アシをみつめる

立教大学大学院 21世紀社会デザイン研究科 教授 萩原 なつ子氏

今年の夏も行ってきました、「りあすの森」のサマーキャンプ! (※) 去年生まれたばかりの馬のさくらも、オレンジもオリーブも元気に待っていてくれた。ただ、さくらはジャジャ馬で、人を乗せるトレーニングが間に合わなくて乗馬はお預けとなってしまった。昨年同様、特別講師として参加した元 JRA 騎手の岡部幸雄さんは現地に着くなり颯爽と馬にまたがり、子どもたちが安全に乗馬できるようにと、2頭を馴らしていた。その岡部さんが、馬より夢中(?) になって子どもたちと一緒に取り組んでいたのが「茅葺屋根」作り。今回のサマーキャンプのプログラムには三つの目玉があった。一つ目は、馬の手入れと乗馬。二つ目はホタテの養殖場に行って、養殖の方法を学び、BBQ を楽しむこと。そして三つ目が北上川で刈ったヨシ(葦) で小さな茅葺屋根を作ることだ。

りあすの森が活動している宮城県石巻市北上町は北上川の河口に位置している。北上川には広大なヨシ原が広がっていて、日本有数のヨシの産地である。東日本大震災で6割ほどのヨシが失われたが、4年を経過してかなり再生に向けて進んでいるようだ。りあすの森ではヨシ原と、ヨシ文化の保全活動も活発に行っていて、冒険家・石川仁さんの指導のもと、南米のティティカカ湖に伝わる工法による、ヨシ舟作りのワークショップも毎



未来の茅葺職人たち!

年行っている。ヨシ舟作りは震災で休止していたものを、昨年から復活させている。7月におよそ100kgのヨシを使って作られた長さ4mのヨシ舟は「北上の箱舟」と命名された。ヨシ舟は「川から海へと向かう自然環境は美しいだけでなく学びのヒントが豊富」という北上川に浮かべられ、体験学習に活用されている。

サマーキャンプでは、佐藤茅葺店さんのご協力で、茅葺屋根づくりワークショップが行われた。茅葺屋根を外から眺めることはできても、茅葺屋根がどのような仕組みになっているかまではわからない。ましてやどうやって作るのかを日常生活で体験することはなかなかできない。ワークショップでは屋根に使われるヨシ以外の自然素材や、海外の茅葺屋根のことも教えていただいた。子どもたちも熱心に聞いていた。

注意事項を聞いて、軍手をはめて、小さな茅葺屋根作りが始まった。小さなとはいうものの、かなりの量のヨシを使う。土台にヨシをのせていく際のヨシの向きも大事。いよいよヨシを固定する作業まできた。大きな針に紐をさして、外と中で声掛けしながら固定していく。息の合った作業をしないと危険が伴うので、最も緊張する作業である。子どもたちはヘルメットをかぶって中に入り、「もっと左、右、上、下!」と元気よく声をかけながら協力し合ってヨシを固定する作業を進めていった。そして、最後は、全員で綱を持ち、屋根をぐるぐる巻く、仕上げの作業を行った。これが思ったより大変な作業だったが、みんな汗だくで一生懸命頑張った。そして1日かけて丸い屋根ができた。歓声があがった!

茅葺屋根作りを体験した子どもたちの中から、未来の茅葺職人が生まれるかもしれない。そんな予感を抱きながら、北上を後にした。次は、来年1月のヨシ刈りだ! ヨシ、行くゾウ!

※ 60号 連載43「1000年先の未来をみつめる」にてNPO法人りあすの森の取り組みをご紹介します。

# 次世代へのメッセージ

ダイセン株式会社 記者 富永 周也氏

ユニフォームのモデルチェンジを取材する機会が増えました。ビジネスユニフォームの需要は企業業績と連動するので、増加は政府の景気対策の効果と見ていいでしょう。業種は金融、鉄道、航空業など。なかでも10年ぶりにユニフォームを復活させる三菱東京UFJ銀行は、来年1月から接客担当の1万6,000人が着用するメガ案件です。

一方で各地の中小企業はどうかというと、定番ユニフォームの商況をきく限り「まだ…」という状況。「アベノミクス」が戦略どおり地方に波及していくか、いよいよ正念場です。

景況に左右されやすいビジネスユニフォームに対して、スクールユニフォームの市況は比較的安定しています。少子化で生徒数は減少傾向ですが、そのぶん入学者の獲得競争は激しく、高付加価値な学生服で差別化を図る学校は少なくありません。こうした状況から、制服業界では展示会などで啓もうに力を入れています。

チクマはこのほど、学校制服を軸にした社会活動「服育」をテーマにした展示会「服育ミュージアム」を東京・大阪で開催しました。服育は「衣服を通して子供達の豊かな心を育む」ことを目的に同社が2004年に提唱。各地の中学・高校を対象に地球環境や制服の着こなしをテーマにしたセミナーなどを続けてきました。共催は専門店で行く「服育研究会」。愛知、京都、東京で発足しています。

展示は保護者の要望を活かした園児服や小学生服、盛夏・防寒ウエア、高視認性安全服、ファッションショーに講演会とバラエティー豊かな内容。地域や大学、団体との連携の広がりをうかがわせました。

環境コーナーも充実しています。同社は1995年に「環境推進室」を設置しユニフォームのリサイクル事業に着手、2004年に法制化された「広域認定制度」の許認可（環境大臣認定）を全国で初めて取得。以降は生産、着用、廃棄までの環境負

荷削減、「カーボンフットプリント」などの環境ラベルの取得、福島県での「ふくしまオーガニックコットンプロジェクト」への参画など、この分野で豊富な実績を持っています。会場では制服とエコロジーの関わりを学校関係者にわかりやすく解説していて感心させられました。

同じ時期、学生服大手のトンボ（岡山県岡山市）は環境省の「環境人づくり企業大賞2014」の優秀賞を受賞しました。同社は2011年に真庭市が実施する国内クレジット制度の取り組みに調印。同市の「バイオマスタウン推進パートナー」として、CO<sub>2</sub>削減のためのカーボンオフセット（相殺）活動を続けています。また、山林地域で社員と家族が里山保全活動や生物多様性保全活動「トンボの里プロジェクト」を実施するなど森林整備活動に取り組んできたことが評価されました。

環境保全活動は、見えにくいものです。10代の若者たちに問題を身近に感じてもらうために、毎日袖を通す制服は最適な教材といえます。さらに踏み込んで「着るだけでなく、何かできるかもしれない」と考えてもらえれば、制服は次世代へのメッセージツールにもなり得るでしょう。作り手の思いが届くことを願います。



10年間の事業の成果を集めた「服育ミュージアム」

## 「欲張らず、実直に、信頼繋ぐ」 の姿勢で

ミスズユニム株式会社 専務取締役 今井 貴宏氏



ミスズユニム株式会社は、東京・蔵前に本社を置く中堅のユニフォーム企業です。官公庁及び民間企業向けに、オリジナル制服を中心とする展開をしています。“企業を語るユニフォーム”を合言葉に、環境にも配慮したミスズ・イズムが際立ちます。専務取締役の今井貴宏氏は、「欲張らず、実直に、信頼繋ぐ」の姿勢で、地道な成長に静かな闘志を燃やしています。

——創業の経緯についてお聞かせください。

創業者である祖父（今井頼利氏）の実家は、古くから生糸で有名な長野県・岡谷で、製糸工場を営んでいました。ところがある時、生糸相場の波乱に巻き込まれ、廃業を余儀なくされたそうです。その後、祖父は縁あって大手の紡績工場から誘いを受け、駐在員として中国の青島勤務となりました。ここで紡績の知識を得るとともに、人との繋がりもいろいろ生まれたようです。それがきっかけで終戦後の1950年、官公庁向けユニフォームの製造・販売を始めたと聞いています。

——そして戦後の復興に合わせ、業容を広げられたのですね。

1957年に民間企業用オーダーユニフォームの製造・販売を開始しました。戦後の混乱が一段落し、企業も制服に目を向け出したのを先取りする形でした。その後、東京オリンピック、大阪万博などが起爆剤となって、ユニフォームのファッション化が経済の高度成長とも重なって急速に進みました。それとともに事業内容を広げたのです。

——現在、柱にしている事業は何ですか。

官公庁、企業用オフィスユニフォーム、ワークユニフォームの企画・提案と製造・販売です。オリジナルユニフォームを柱に、カタログによる販売も全方位で行っています。売上高の約半分は官公庁向けで、その多くは警察関係です。

——2004年に社名を改められましたね。

およそ半世紀に渡って、創業以来の社名である「美鈴産業」を守ってきました。創業者の出身地である長野県には、ヘナブリ釣りが秋の紅葉などで知られる「美鈴湖」があり、それにちなんで名づ

けられました。他にも信州には「美鈴」に由来するものがたくさんあり、今も多くの人々に親しまれています。

しかし、時代の変遷とともに美鈴産業では、一体何をしている会社なのか漠然として分かりにくい、イメージが古いといった声が漏れ出しました。そこで現社長（今井承一氏）の意思により、漢字からカタカナに変えるなど新鮮さを強調して「ミスズユニム」に変えました。

——新しい社名には、別の意味も込めたそうですね。

伝統ある美鈴のイメージを残しながらも、ラテン語の「ユニマナス (nimanus)」を略した「ユニム」を組み合わせ、命名しました。ユニマナスの語源には「勝利を勝ち取る一本の手」という意味があります。ここから“お客様である企業が成長・発展するための有効な手”という二重の意味を込めています。

また、英語読みの「misuzu unim」は、当社を代表するシンボルマークとしてデザインしています。ブルー、レッド、グリーンの3配色は、「便利と喜びと感動」を表しています。

そして、シンボルマークに添えた英文のスローガン「advantage uniform (アドバンテージ ユニフォーム)」は、お客様が成長・発展の勝利を勝ち取るためのユニフォームという意味です。



便利と喜びと感動を表すシンボルマーク

——御社のユニフォームには、独特のメッセージがありますね。

当社はユニフォームを単なる作業服とは考えていません。会社のイメージ・宣伝に繋がる“企業にとっての顔”と位置づけています。また、仕事に対する意欲を高揚させるとともに、信頼感を高めるための大切なツールでもあります。デザインや機能性に拘わるだけではなく、それぞれ企業のイメージアップに繋がると同時に、環境にも優しいユニフォームの提供を目指しています。細かい部分にまで行き届いたデザインなど、当社独特の付加価値を乗せてお客様のお役に立つことがモットーです。周囲から「あの会社のユニフォームはパツとしている」との印象を持たれば、従業員の労働意欲も向上するはずで

——その代表的な例が、オリジナルユニフォームですか。

その通りです。お客様に対するヒアリングからデザイン提案、サンプル作成、生産、納品までの全てを担当しています。デザインは複数の企画集団と契約し、生産は国内外の協力工場とネットワークを結んで体制を固めています。特徴は小ロット・低価格・スピード感（短納期）です。最低ロットについては国内生産の場合、10着で対応することもあります。採算的には厳しいですが、お客様へのサービスという総合的な判断で受けている例です。企画から縫製、物流まで強力なチームがあるからこそできるのです。

——ユニフォームに関連したマーク加工にも力を入れていますね。

社名のロゴマークなどは、オリジナル性を高める上でも欠かせません。企業の存在感をアピール・宣伝できるだけでなく、他社との識別、セキュリ

ティーの面でも重要です。早くからこの点に着目し、刺しゅう、プリント、ワッペン、織りネームなど様々に対応してきました。お客様にユニフォームをご提案する際、こうしたマークをあらかじめ用意し、提示させていただくことで商売がスムーズに運ぶケースも多いです。そこで4、5年前から一層力を入れるようになりました。

——現在の商圏は、どのようになっていますか。

東京を中心とする神奈川、埼玉、千葉の1都3県がメインです。遠方では物流センターを置いている福岡市内の営業所を今年5月に、支店へ格上げし、九州全域での営業を開始しています。その他の地域は、インターネットなど通信販売で対応する仕組みです。

——生産は国内、海外の両方で行っていきますね。

中国生産は、コスト的にも年々難しくなりました。これに対して国内生産は、比較的安定しています。しかし、将来を考えると後継者難、熟練者の減少、従業員の高齢化など心配な面が多々あります。今後の生産も国内外のバランスを見極めながら続けることとなりますが、国内生産は人員の確保からも悩ましい問題です。

——環境問題にも積極的に取り組んでおられますね。

2005年に環境生活文化機構のメンバーとなり、そのシステムを活用して使い終わったユニフォームのリサイクルを始めました。当時はお取引先から環境経営マネジメントに対する問い合わせが多く、環境意識の高さに驚かされたそうです。それにしっかり応えるため、環境に優しいユニフォーム企業を目指して、2007年には「ISO14001」の認証を取得しました。運用面から今年2月には、環境省の「エコアクション21」(\*)の認証登録に切り替え、弊社の環境方針（別項）にのっとり、

### ミスズユニム株式会社 環境方針

#### <基本理念>

ミスズユニム株式会社は、「企業を語る」ユニフォーム作りを目的に、お客様からの信頼を頂くことを喜び、誇りと、より良い地球環境の実現の為に環境経営マネジメントシステムを導入し、社員一丸となって環境保全活動に積極的に取り組んでまいります。

#### <基本方針>

1. エコアクション21 環境経営システムを構築・運用し、次の事項について環境目標・活動計画を定め、環境保全に関する法規等を遵守しながら改善に努めます。
  - ①電力及び燃料使用の省エネに取組み、二酸化炭素排出量の削減に努めます。
  - ②廃棄物の排出量の削減に努めます。
  - ③排水量の削減に努めます。
  - ④エコ商品の利用など、グリーン購入の推進に努めます。
  - ⑤環境負荷の少ない製品の販売に取り組めます。
  - ⑥ユニフォームのマテリアルリサイクルをし易い製品の推進をします。
2. 環境目標を定め、定期的に見直して継続的改善に努めます。
3. 環境方針を全社員及び協力会社に周知し、環境保全への意識向上に努めます。 制定日：2014年7月10日

\*エコアクション21 認証・登録制度：エコアクション21 ガイドラインに基づき、製品・サービスを含む事業活動で、省エネルギー、省資源、産業廃棄物などの効果的、効率的な取り組みを行う事業者を環境省が審査し、認証・登録する制度。

環境保全活動を全社的に徹底しています。

エコアクション21では、PDCAサイクル（企画-Plan、行動-Do、確認-Check、改善-Action）の考え方で活動し、「環境活動レポート」の報告が必要になります。節電による電気代のコスト削減など効果が目に見えて分かりやすいため、職員の環境意識が高まりました。また、リサイクルでは再生PET素材などの生地によるエコマーク対応のユニフォームも揃えています。

——東京オリンピック・パラリンピックへの取り組みについてお聞かせください。

東京に本社を置く企業でもありますので、何らかの形で貢献したいと考えています。ただ“五輪特需”のような一過性で終わらせたくはない。その先にも続くような内容でありたいと思います。東日本大震災の復興工事に伴って、現場作業者の不足状態が続いています。この影響で東京も湾岸部では人集めに苦労されているようです。少しでも多く集めるため、ユニフォームを恰好良いもの

にする動きが目立ちます。こうした要望にお応えしたい。オリジナルユニフォームあるいはカタログ、さらにオリジナルとカタログの合わせ技などで提案できるよう頭を巡らしているところです。

——環境生活文化機構に対する要望をお聞かせ下さい。

社会や企業に対するユニフォームリサイクルの積極的な啓蒙活動をお願いしたいと思います。自らも取り組まなければならないテーマですが、組織を挙げてとなると、その訴求力は違うと考えるからです。

（記・所 昌平）

ミスズユニム株式会社の概要

創 業	1950（昭和25）年8月
本社所在地	東京都台東区蔵前 4-10-8
資 本 金	2,040万円
従 業 員	12名
年 商 額	7.5億円

事務局だより



環境おもてなし企業活動誓約事業 企業誓約募集のご案内

本機構は、2020年東京五輪を契機に「環境都市づくり」を目指した首都圏における企業の環境に配慮した活動を全国に向けて発信することを目的として、「環境おもてなし企業活動誓約事業」を次のとおり実施いたします。

◆環境おもてなし企業活動誓約事業とは

1. 企業活動誓約の募集

本機構は、広く一般の企業を対象に、環境に配慮した活動を実施する誓約「環境おもてなし企業活動誓約」を募集します。

▶ 誓約する環境に配慮した活動とは

- ・「環境都市づくり」に貢献する環境に配慮した活動であること
- ・定性的・定量的な評価ができる具体的な活動であること
- ・波及的な環境効果が期待できる活動であること

2. 企業による環境活動の誓約

参加を希望する企業は、自社が実施する環境おも

てなし企業活動についての誓約書と登録書、企業の概要の分かる資料を、誓約委員会（本事業をとりまとめる有識者によって構成）に提出します。

3. 誓約企業による環境おもてなし企業活動の実施

誓約をした企業は、各企業の誓約内容に沿った環境おもてなし企業活動を実施します。

4. 活動状況の報告・結果の公表

平成28年度末に、各誓約企業からそれまでの活動状況についてご報告いただきます。誓約委員会はその成果をまとめ、広く公表します。

◆実施期間 平成27年度～平成28年度

◆後援 環境省

詳細は、本機構ホームページに、平成27年10月公開予定の事業専用ホームページをご参照ください。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

季刊 エルコレージャー vol.64

発行者：公益社団法人 環境生活文化機構 発行日：2015年10月1日 〒105-0003 東京都港区西新橋1丁目20番10号 サンライズ山西ビル6F  
TEL：03-5511-7331 FAX：03-5511-7336 http://www.elco.or.jp E-mail:elco.inc@trust.ocn.ne.jp